

### 3. 流域の社会状況

#### 3-1. 土地利用

流域内には、三本木原を中心とした農地や放牧地が広がっており、稲作や根茎菜等の畑作、稲作、畜産が行われている。放牧地は流域の上流側に多く点在しており、水田は七戸川、土場川、砂土路川などが集まる低地に集中している。

流域の土地利用状況についてみると、山地等が約 69%、水田や畑地等の農地が約 29%、宅地等の市街地が約 2%である。

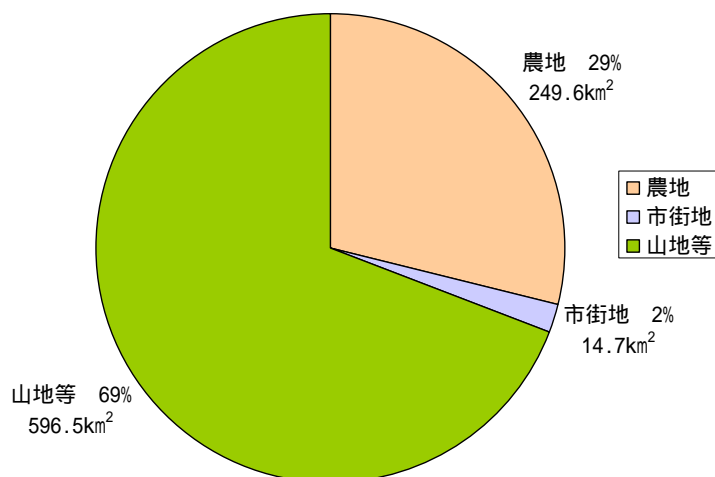


図 3.1.1 高瀬川流域の土地利用面積  
出典：「河川現況調査（調査基準年：平成 7 年度末）」

#### 3-2. 人口

高瀬川水系では、流域内人口は長期的には微増傾向にある。昭和 55 年の約 80,600 人と比較して、平成 10 年では約 84,600 人であり、約 5%の増加となっている。

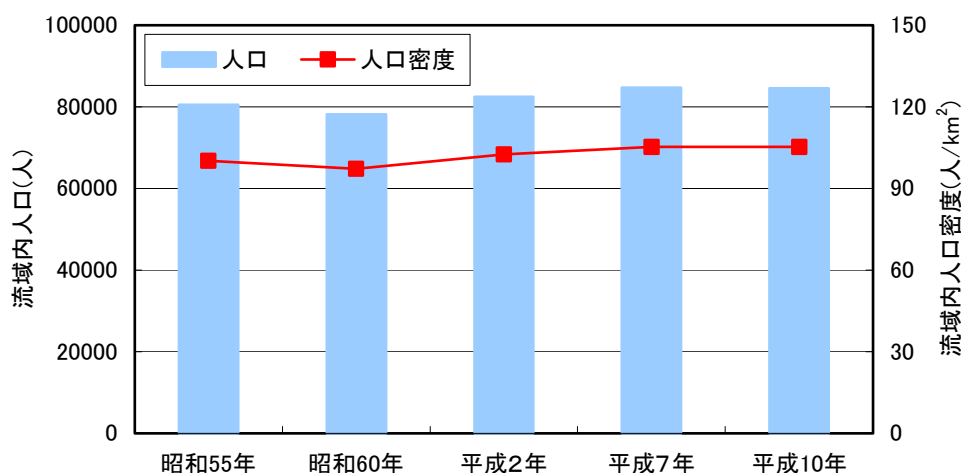


図 3.2.1 高瀬川流域の人口の推移

### 3-3. 産業と経済

#### (1) 概要

高瀬川水系は、中下流部に青森県上十三地域の拠点である三沢市、十和田市等を擁し、この地域の社会・経済・文化の基盤をなしている。

高瀬川流域に関連する2市5町2村における産業別就業者数の推移は、表3.3.1および図3.3.1に示すとおりである。農業などの第1次産業人口は減少しているものの、第2次および第3次産業の就業者は大きく増加し第1次産業就業者の減少を上回るものとなり、全体としては産業就業者は経年的に増加している。

表 3.3.1 高瀬川流域市町村における産業別就業者数の推移

	総就業者数	第1次産業	第2次産業	第3次産業
昭和55年	85,478	26,936	18,812	39,699
昭和60年	87,877	25,362	19,759	42,655
平成2年	88,458	21,222	23,097	44,110
平成7年	91,521	16,731	26,465	48,281
平成12年	93,989	14,259	27,636	52,002

(データ：青森県HP、統計データランド)

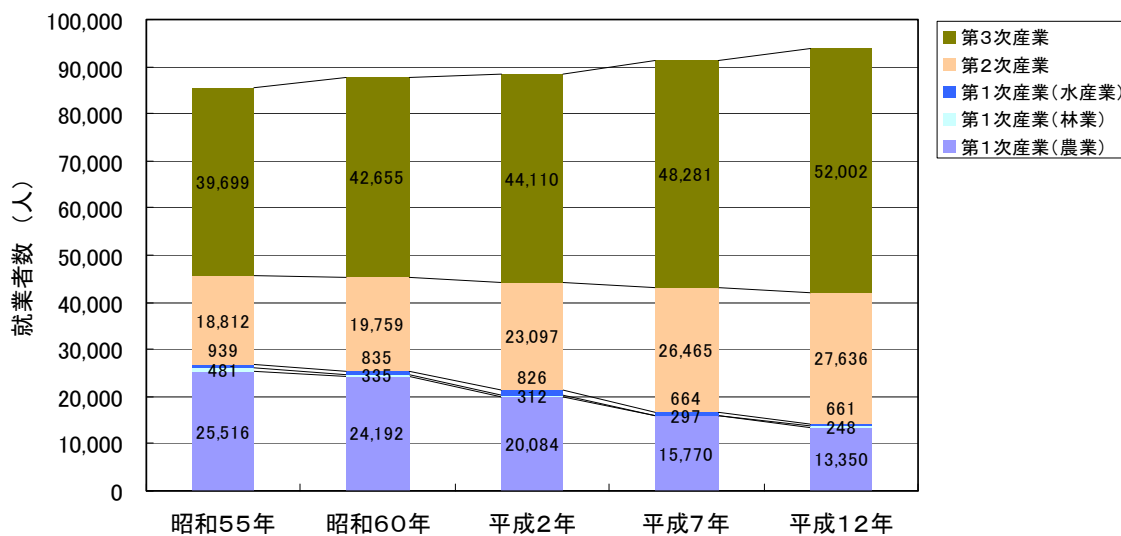


図 3.3.1 高瀬川流域市町村における産業別就業者数の推移

(データ：青森県HP、統計データランド)

## (2) 製造業

流域内の工業出荷額をみると、昭和 55 年の約 160 億円に比較して平成 10 年では約 360 億円と約 2.3 倍に増加している。

業種としては、食料・飲料等、電気機械の 2 分野の占める割合が大きくなっており、平成 10 年では全体的出荷額に対してそれぞれ約 25%、約 22%のシェアとなっている。

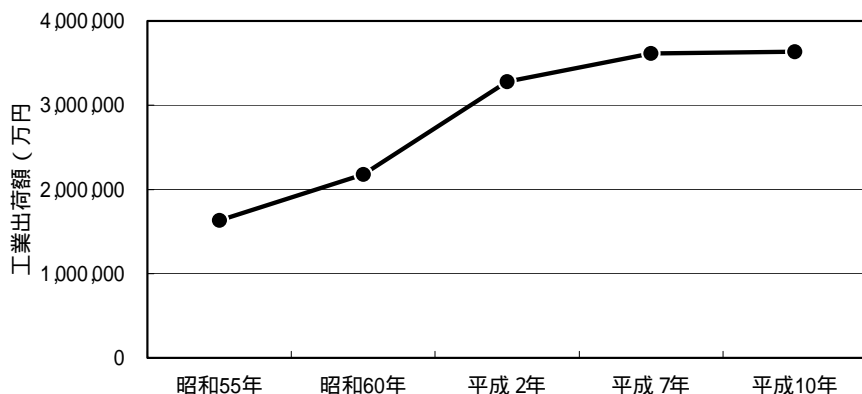


図 3.3.2 高瀬川流域内の工業出荷額の推移

## (3) 漁業について

小川原湖では、古来より「たから湖(沼)」と呼ばれるほど魚介類に恵まれており、ヤマトシジミ、シラウオ、ワカサギなどの内水面漁業が盛んで、湖周辺は古くより人々の生活の場として利用されていた。内水面漁業(湖沼)の 2001 年漁獲高は宍道湖(島根県)に次いで全国第 2 位であり、地域の経済を支えている。

小川原湖内水面漁業の中核をなすシジミ漁獲量は全漁獲量の約 50~60%を占めており、近年の漁獲量は漁協による自主的な漁獲量制限のもと 2,000~3,000t/年で推移している。湖口マウンドは、ヤマトシジミの産卵場となっている。

また、マテ漁、シガビキ漁などの伝統漁法は高瀬川の風物詩であり、文化的にも重要な漁法である。マテ漁は、東南アジアを起源とする南方型の漁法で小川原湖が北限かつ日本で唯一とされる。また、氷下曳(シガビキ)漁は、中国北部の黒竜江付近を基点とする北方型の漁法で小川原湖が南限とされる。マテ小屋保存のため、六ヶ所村では小屋の改築を行った。



氷下曳(シガビキ)



マテ漁(マテ小屋)

図 3.3.3 小川原湖における特徴的な漁法

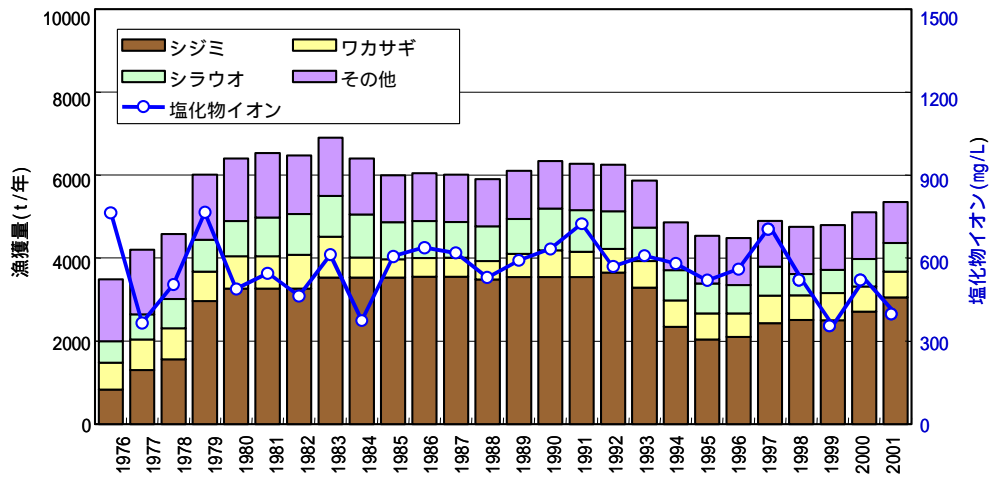


図 3.3.4 小川原湖における漁獲量の推移と塩化物イオンの状況

### 3-4. 交通

高瀬川水系の交通については、JR東北本線、三沢飛行場、国道4号等の基幹交通施設に加え、東北自動車道八戸線、東北新幹線が整備中であり、交通の要衝となっている。

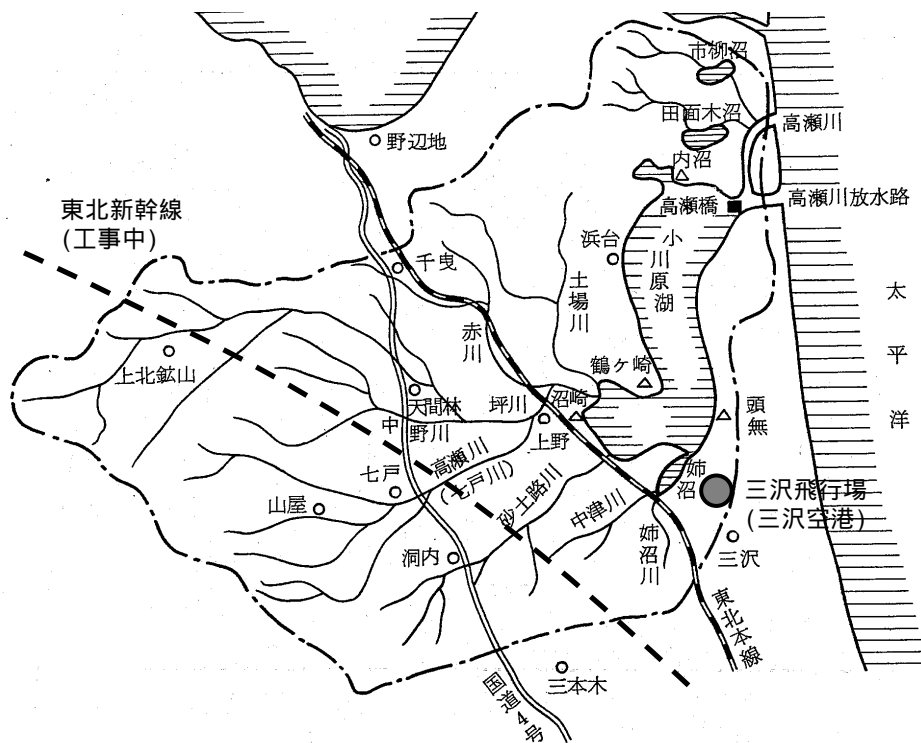


図 3.4.1 高瀬川流域図と主な交通の状況